岡山理科大学教育実践研究　第6号　pp.33-42（2022）

中国語教授について覚書（発音編）――若干の疑問提示と提案――

淺野純一
岡山理科大学教育推進機構基盤教育センター

はじめに

かれこれ三十年余り中国語を大学生に教えてきた。その大部分は、大学の教養課程（もしくは教養科目あるいは基盤科目）の中国語初級であった。

自分自身の学習歴を振り返ってみれば、学部、院生時代を通じて現代古代の中国語の読解ばかりで、体系的な発音や文法はあまり意識していなかったように思う。

運良く金沢大学に職を得て中国語を教えることになり、当時のいわば「上司」であったＩ先生に、竹島金吾『中国語作文』（金星堂 1975、現在古本市場では随分高価がついている）を手渡され、「これでもって自分も勉強しながら教えなさい」といわれたのは懐かしい思い出である。

まさに言われた通り、勉強しながら自分なりに工夫しながら中国語を教えてきた。むろん自信はないけれど、発音と文法に関して、その自分なりの工夫と知見、与太話といくつかの疑問を定年を前に記しておきたいと思う。

アメリカで開催されたある理系の国際学会で、ドイツ人の司会者が「この学会の共通言語はイングリッシュではありません、プア・イングリッシュです。どうぞ遠慮なく発言してください」と開会の冒頭で述べた、という逸話を何かで読んだ覚えがある。

お断りしておきたいのは、以下に述べることは、あくまで初修者、入門の授業についてのことであり、中級上級に進むにつれて細かな調整をし例外を学ばなければならないこと、いうまでもない。これはキリのないことである。

本論では、発音（ピンイン、すなわち中国語発音のローマ字表記の読み方）について述べる。文法については別稿を予定している。

中国語は、漢字で表記するがその際、一字一音一義が原則である。日本語のようにさまざまな音訓が存在するわけではない。例外も多いが、初級段階ではせいぜい十文字程度であろう。発音は、ピンイン（拼音）で表記されるが、これも英語のように一文字に対していくつもの発音（can/city third/thay tag/take/read like/lily ）があるわけではない（変音記号ウムラウトと介音が省略されることはあるが）。原則としてピンインのローマ字表記をそのまま発音することと、日本語や英語の読みと違う部分をしっかり学習することが重要であり、以下はそれについての説明である。

中国語の発音については、どの教科書も、どの先生もかなり熱心に教えているように見受ける。発音に特化した参考書さえある。巷では、中国語は発音が難しいというのが定評である。確かに、アナウンサーのように流暢な中国語を身につけるのは、なにも中国語に限ったことでなく、難しい。

しかし、日本で生活している多くの外国人が日本語らしくない発音やアクセントで日本語を喋っているのをみると、初学の段階で完璧な発音を身につけることは不可能だし、不要でもあると思う。完璧なイントネーションで日本語を話す外国人は、稀有である。むろん日本語に限ったことではなく、母語がなんであれ、外国語を学ぶとそうなるのだろうし、それでとりあえずはよい。

ほんの数年ではあるが、留学や仕事で中国に住んだことがある。日本人（日本語を母語とする人の意で用いる、以下同じ）の中国語は、かなり上手な人でもすぐそれとわかる母語干渉があった。西洋人も同じであった。筆者自身の発音は、それと意識して発話すると、かなり「良い」発音であった（らしい）。井崗山での毛沢東関係の学会で発表したとき、むろん前もって練習して原稿を読み上げたのだが、毛沢東の孫の毛新宇さん（軍事史がいちおう専門）に中国語がうまいと認定され個別インタビューを申し込まれたことがある。そのときは悪い気はしなかったが、テーマが「満洲国」崩壊の折、満州に攻め込んできたソ連の将軍の戦略と日本軍の対応、といった内容、筆者には全く知識のないことで件のソ連将軍の名前さえ知らない、から聞き取れない、受け答えができず当然言葉に詰まる、毛氏、お付きの人に、こいつ中国語が聞き取れない（聴不懂）んじゃないか、と話しかけたのは、はっきり聞き取れた。幸い、同席してくださったやはり軍事史を専門とするＴさん（さして発音はよろしくない）が話を受け取ってくれて、なんとか体をなし、翌日のローカルテレビで放映されていた。大恥をかいたわけだが、発音より専門知識の方がよっぽど大事である。

北京で生活したことのある多くの日本人が口を揃えるのは、北京の地の言葉（北京土話）は実に聞き取りにくいということだ。これは、筆者も経験したし、のちに北京に留学したことのある同僚と学生を引率して南京に行ったとき、「タクシー運転手の言うことが、全部聞き取れる」とその同僚は感動していた。

およそ中国南方の人はおおむね巻舌音が苦手で、台湾人に至っては巻舌音は舌歯音で置き換えている。上海語で生活している人は、n と ng の区別さえあやふやだと、留学時代に『新民晩報』で読んだ覚えがある。

つまりは、発音はとりあえずは通じさえすれば良い、と思うのだ。そのためのポイントを押さえておけば良い、と。極端なはなし、無気音は濁音でも構わない（後述）、と。要するに、ソシュール先生が言う通り、その音価が他の音価と区別できればそれで良い。

１　音節と声調

まず強調しておきたいのは、中国語の一音節は、日本語の二音節に相当する、と考えること。音読するときそれを意識すれば、正確な発音をしやすいし中国語らしいリズムに馴染みやすい。カタカナに直すといささか覚束ないところもあるけれど、xi はシではなくシイ、cu はツではなくツウ、qiao はチアォ、zhao はヂャオ、chuang はチュアンである。発音の後半部分は母音（または母音＋鼻母音）となり、これをしっかり発話することで明確な発音となる。こう考えると、とりわけ、声調の習得には適している（中国語音のカタカナ表記については別に述べる）。

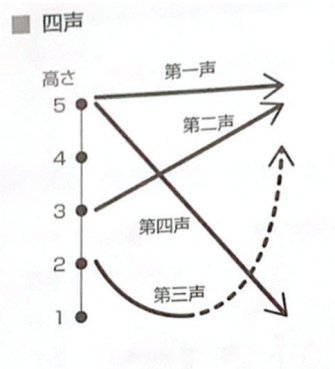
日本語も、英語のようなアクセントではなく高低で単語の抑揚を規定するのだが、前後の音節との関係でその音節の高低が決定される。つまり日本語の一音節は、高いか低いかのどちらかでし

かないからだ。また、連語になるとその高低が変化するのがややこしい。岡山と大学、これをつなげて岡山大学と声に出してみれば、高低の変化は自明である。

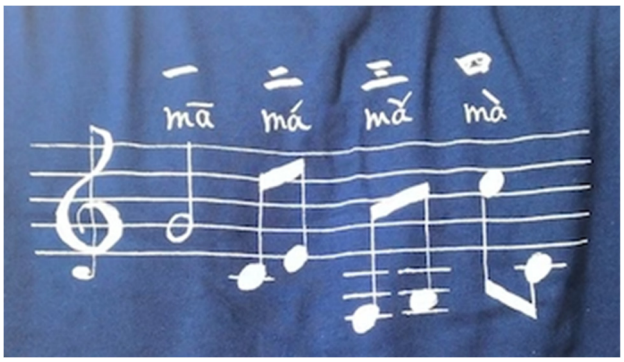
中国語の一音節が日本語の二音節に相当すると考えると、一つの音節で高低の組み合わせが四通りできる、すなわち四声が可能であることがわかる。もとより音声学的に精確を期すことはできないが、四つの声調を、高高／低高／低低／高低の組み合わせとすれば説明も理解もしやすい。例えば、日本語の「はし」を例にとって、「は」と「し」にそれぞれ高低を振り分けて説明するとわかりやすい。一声「端」、二声「橋」、第三声は「高橋のはし」、第四声「箸」とおおむね日本語を例にとって説明できる。そして、これらは以下の場合以外変化しない。

第三声は、単独で発音するときは語尾がやや上がること、第三声が連続するときは第二声になることも述べなければならないが、そう重要ではなかろう。一と不の変化も同様である。軽声は、その日本語二音節分を日本語一音節に縮めて軽く発音する。したがって、声調はありえない。

たしかに多くの教科書に記載されているように、単純に高低に二分されるものではないのだが、かといって教科書にしばしば現れる高低の割合を示したグラフのような図（下図、張勤『中国語の教室』白帝社による）よりも単純な高低で説明するほうが、学習者にははるかに観念しやすい。



この図は、おそらくは機械的に測定したものであろうが、縦軸横軸になんの単位も示されていないし、適宜楽器で模倣してもそれらしい高低、というか旋律にはならない。むしろ下図のような音程がまだ正確だろう。（ツイッターyong10@yongtian さん 220611 から拝借）



以下余談であるが、日本語の古典的な詩歌（和歌、俳句、長唄など）は全て五七調であるが、五・七といいながらその実、以下の例の如く八拍子、エイトビート、一拍（一音）が八分の一音符である。ついでに言えば、三三七拍子もその実エイトビートである。メトロノームを適当な速さの八分の八拍子に調整して、それに合わせて適宜既知の和歌なり俳句なりを音読してみれば、誰でも肯んじるだろう。八分音符で一音節である。

（♪は空拍）

ちはやぶる♪♪♪
かみよもしらず♪
たつたがわ♪♪♪
からくれないに♪
みずくくるとは　♪

かきくえば♪♪♪
♪かねがなるなり（シンコペーション？まで入っている）
ほうりうじ♪♪♪

では、中国語の古典詩歌、つまり漢詩の場合はどうであろうか。

一拍（一音節）は四分の一音符の長さであり、日本語の倍である。上の日本の詩歌と同じテンポのメトロノームに合わせて中国語で朗読してみればうなづけるであろう。

ただ、中国の古典詩歌は、四言、五言、（六言？）、七言、さらには詞というリズムから見ればランダムといっていい詩型もある。また五言詩は、例えばネット上でその朗読を聞いてみると、四分の三拍子と考えていいのではないか（これはあるいは楚辞に由来するかもしれない、しらんけど）。まあ、いずれにしろ四分音符が一音節である。

以下に、やはり幾つか例を挙げてみよう。（♩は空拍）

四言（四分の四拍子）　詩経・

関関雎鳩
在河之洲
窈窕淑女
君子好逑

五言（四分の三拍子 or 六拍子）

勧君 ♩金屈巵　quàn jūn♩ jīn qū zhī
満酌 ♩不須辞　m ǎ n zhuó♩ bù xū cí
花発 ♩多風雨　huā fā ♩duō fēng y ǔ
人生 ♩足別離　rén shēng ♩zú bié lí

※勧君金屈巵♩、と六拍子であるとも考えられる。

七言（四分の四拍子 or 八拍子）

故人西辞黄鶴楼 ♩
烟花三月下揚州 ♩
孤帆遠影碧空尽 ♩
唯見長江天際流 ♩
※相見時難 ♩別亦難　東風無力 ♩百花殘　いう可能性もあるかも？

この場合の漢詩の朗読は、訓読はいうまでもなく音読で朗読してもうまくリズムに乗れない。音読は古い中国語の語音によるとはいえ、また多くは仮名二文字分の長さであるとはいえ、かなりの程度で仮名一字に置き換えているものがあるからである。「奇妙」「地図」などがそうであるが、さらにいえば、これは年配の方に多いのだが日本語がかなり堪能な中国人でも、これらをつい「きいみょう」とか「ちいず」と発話する方が散見される。こういう例は、しかし、逆に中国語の一音節の長さが日本語のほぼ二音節分であることの傍証でもある。

ついでにいえば、反切という古典的な発音の記述方法もまた上述を支持するのではなかろうか。

２　母音

2−1　単母音

中国語の単母音は、ピンイン表記で a,o,e,i,u,ü の6音である。他に巻舌音と舌歯音の ｉ があるが、これは子音の項で述べる。どの発音も、できるだけ大げさに発音することと、単母音であっても先に述べたように中国語の一音節であるので、日本語の二音節分の長さがあることに注意しなければならない。単母音の ａ は、アではなく、アアである。ｉ もイではなく、イイである。さらに日本語の二音節分と意識するとき、二音目をより意識すると、声調も自ずと意識できよう。

a,o,i は日本語とほぼ同じとして、できるだけ大げさに発音する、で良い。ü は、日本語には普通存在しない音であるが、ユとイを合わせたような・同時に発音するような音、と説明すると、なぜかほとんどの初学者は発話できるようになる。

ｕ はウにほぼ相当するが、われわれが日本語で会話する際よくよく意識してみるとほとんど口を（アゴも口腔内も）閉じた状態で発話している。甚だしい時は母音を省略することさえある（〜です、パンツ、とか）。これは、ｕ よりも舌歯音 zi,si,ci の ｉ 音に近い。口を窄めてやや顎を開け、口腔内を広く取るようにすることと、ウではなくウウであることを意識すると良い。後述するように、zi,si,ci（カナ表記するとズー、ツー、スー）と zu,cu,su （ズウ、ツウ、スウ）の違いを比較的うまく発音し分けることができる。

ｅ はわれわれ日本人にはもっともなじめない音であることは、論を待たないであろう。アにもウにもエにもオにも聞こえる。オとエの間の音、アとオとエを合わせた音、ドイツ語の ö の音、英語の曖昧母音 girl の母音、とさまざまな説明を試みるが、今ひとつ要領を得ない。ただ、アゴを比較的大きく開けることは重要であろう。アの口でオを発話する、ともいえよう。ただ、複合母音となったとき、i,n と結びつくと、われわれ日本人にはエ音にしか聞こえないし、またエで発話してもほぼ問題ないのが悩ましいのだが、ｅ はエ音でないことと口を開けることは強調しておかねばならない。

2−2 複合母音

複合母音は基本的に上述の単母音の組み合わせである。ここでも一音節の長さ（つまり単母音だけの時も同じ長さであること）を強調しておく必要はあろう。

前述したようにいささか悩ましいのは、ei,ie,üe,en の組み合わせである。耳のいい人が、聞き慣れた人が聞けば標準的な発音ができるネイティブの発音は、確かにエでもオでもアでもない e なのだが、i,ü,n は口を閉じる音なので普通の日本人にはエ音に聞こえるし、そう発音してもほぼ通じてしまう。というわけで、この場合はエ音でもよしとしておく。

つぎに介音の問題であるが、これも説明はしておいたほうが良いだろうが、表記通りに読む、というピンインの読み方の原則に沿って発話してもとりあえずは、よい。実際 dui を表記通りドゥイと発音しても、ドゥェイでも、ドゥエでも、まあ通じる（親切なネイティブは直してくれるだろう、つまり聞き取れるのだ）。

あとピンイン表記の問題、子音がない場合 i, ü は y を、u は w を書き加えるということ。y=i, w=u であり、yi はまさにイイ、wu はウウというふうに、前述の通り、日本語の二音節分になるのである。

2−3 鼻母音

鼻母音、日本語でいう撥音は、n と ng の二種類がある。この区別は日本語にもあり、われわれはそれを意識していない。舌先が上口蓋に接しているかいないかの違いであって、よく例に挙げられるのが、案外（ん＝ng）と案内（ん=n）である。これを意識させればそれでよいだろう。ただ、これを聞き取るのは、en と eng 、ian と iang のように前置の母音が影響されるような場合を除いて、日本人には至難の業である。区別があることを意識し、発話するときできるだけ区別すること、単語レベルで暗記することによって慣れるしかない。先にも少し述べたが、上海語話者でさえしばしばこれを混同するのであるから。また、n 音は、日本語の音読でも撥音になること、ng は長音になることも教えておけば理解を助けるだろう。

注意しておきたいのは、ian の発音（子音がない場合の表記は yan ）で、これはほぼイエンという発音になる。i,n はどちらも顎を閉じた音であり、間にある a 音が十分に顎を開けることができないからだと思われる。

※上海語では、n 音の一部は i 系統の音に収斂するようで、例えば半 ban はプュ（三点半はセェディプュ）、麺 mian はミィのような音になる。そのまま n 音で残っているものもある（文、人、民など）のでこのあたりは、音韻の専門論文にまかせたい。

2−4 r 化音

r 化というのは、北方方言とりわけ北京方言に由来するものであり、南方の中国人はほとんど発話しない。そもそも巻き舌の r 音は田舎方言であり、北京語の他に、日本語では江戸弁（べらんめえ言葉）、（低地ドイツ語（たとえばビア）に対して）高地ドイツ語（ビール）、などに多い。

r 化音こそ北京方言が聞き取りにくい原因である。筆者としては、これを撲滅したいと思わぬでもないが、そうもいかない。標準語である「普通話」は、北方方言を基礎とすると規定されており、多くの単語が r 化したものも標準音とされているからである。

実践的には、r 化音があることを認識しておけばとりあえずよい、とはいえ、r 化によって語幹の発音が変わる場合があるので、それを自ら発音する必要は必ずしもないが、覚えておく必要はある。面倒な話である。

複合母音で i で終わる音節と n で終わる音節が r 化した場合、i,n 音が脱落してしまう。具体例として、小孩儿（xiaohair ）は i が脱落してシャオハァルというような音に、一点儿（yidianr ）はイイディァルのようになる。これは、a と er の顎を開ける音に挟まれて、i,n の顎を閉じる音が脱落する、その結果 ian の r 化の場合は a 音が復活するというややこしい現象と考えられる。ともあれ点（dian ）はしばしば r 化するので覚えておく必要があろう。这儿、那儿、哪儿については、例外的な単語として覚えておけばよかろう。

３　子音

3−1　有気音と無気音

子音を説明するときに、まず最初になされるのは、有気音と無気音の違いである。ピンイン表記上は、無気音が日本語の濁音、有気音が清音に相当する。日本人にとっては、無気音の発音が難しい。そこで多くの教師は、これができるよう時間を費やして練習させるのだが、筆者の経験から考えても、何人かの中国語の達人の話からも有気音をしっかりと発音することの方が、重要だと思う。

筆者が学生時代、学生から「ゴンズオ先生」と揶揄（人品や学識についてのそれでは、ない）されていた東洋史の先生がおられた。無気音を全て濁音で済ませておられたからであるが、しかしそれでも中国人とのコミュニケーションに支障があるようには見えなかった。無気音を濁音で代用してもあまり問題がなかった例ではある。下手に濁音を避けて結果、有気音になるよりマシなのだろう。

むろん授業では、例によって薄い紙を口の前にかざして有気無気を視覚化して見せるし、学生にも手のひらを口の前にかざして声を出させ触感で納得させるのではあるが、それを実際の発話（朗読）で体得させるのは難しい。むしろ「優しく」「控えめに」「濁音」を発音するよう心がけるという説明の方が感覚としてわかりやすいようだった。

中国語をカナに置き換える時、人によってさまざまではあるが、無気音の一部は濁音で表記する場合が多いように思える。同じ発音でも声調によって清濁を書き分ける例もある。「不 bu 」は「プウ」でよいが、「本 ben 」などはどうしたって「ベン」であろう。私見では、ピンイン表記との対応を重視して、無気音は濁音でカナ表記したほうがよいと思っている。

問題は有気音である。有気音をしっかり発音することが、伝わりやすい中国語となる。しばしば中国人が日本語を話す時、濁音がじゅうぶん濁音になっていないのと、清音が中国語の無気音になって聞き取りにくい例が見受けられる。おそらくは、清音を有気音で発音すると、日本語としては耳障りなので日本語の教師に矯正されているのではないかと思うのだが、これは邪推かもしれない。

有気音は、例によって薄紙を口の前にかざして視覚化できるが、いちいちこれをやるわけにもいかない、むしろ子音だけで発音できる音と理解した方が良い。無気音の対立項として一般に p,t,k,q,c,ch が授業では教えられるが、他にも f,h,x,s,sh も有気音であり同じく強調すべきであろう。

そしてこれらは子音だけで発音練習することで、有気音を実感させることが有効である。特に x,s,sh と q,c,ch の相違は子音だけで認識させた方がわかりやすい。子音だけの発音練習は筆者の授業でも効果的であった。

あと hu と fu（英語の f とおなじ）の区別（これはカタカナ表記するとどちらもフウ、としかならないか）、tu,ti はツ、チ（タ行）ではないこと（有気音 t で、トゥウ、ティイ）をしっかり認識させる。

3−2 舌面音 ji,qi,xi および 舌歯音 zi,ci,si と巻舌音 zhi,chi,shi,ri

日本語の五十音図は、明治期に考案されたものであるが、子音と母音の組み合わせが必ずしも整合していない。訓令式でローマ字表記すると見た目は整合しているが、実際の音とはかなりかけ離れているので、今でも英語ではヘボン式のローマ字表記が普通である。

とりわけサ行、ザ行、タ行、ダ行のイ段とウ段（シス、ジズ、チツ、ヂヅ）の訓令式ローマ字表記はかなり無理がある（ハ行カ行については、ピンインでは問題にならないのでここでは措く）。したがって、ピンイン表記では見慣れない x だの q だの c だのが用いられる。

これらは、一応以下のように説明する。

舌面音は舌先を下の歯の裏に構えてから発話する。

舌歯音は舌先を上の歯の裏に構えてから発話する。

巻舌音は舌先を上の顎の裏に構えてから発話する、その際舌を反らす／巻き上げるイメージで。

人間の頭部を梨割りにした図で、口腔内と舌の位置を示す教科書もよくあるが、視覚化されるので効果的かもしれない。これらは上述の通りまず有気音の子音だけで練習し、その口で無気音を発音すると良いだろう。

そのじつ、上述の無気音と有気音についてを念頭においた上でいうと、舌面音 ji,qi,xi は日本語ジイ、チイ、シイとほぼ変わらない。学生はどうしても外国語という頭があって、外国語といえば英語なので、ついついズィ、ツィ、スィという発音をしがちであるが、有気音 q,x を母音なし子音だけで練習させたうえで、母音の i イを強調するように発音させると案外うまくいく。

舌歯音 zi,ci,si も子音を i で表記するが、実際にはやはり日本語のズー、ツー、スーとほぼ同じ音価である。我々の日本語は、多くの場合ウ音は、先にも述べたがほとんどイと同じく顎を閉じ、口腔を拡げずに発音しているからであろう。したがって、zu,cu,su はズウ、ツウ、スウとしっかり u ウ音を強調すればうまく発音できる。こと有気音に関しては（それが可能なので）子音と母音を別々に発音してみるとよい。

日本語では単語の語尾を子音だけで済ますことが多い（シ→電子、ス→〜です、チ→ピンチ、ツ→パンツ、キ→電気など）が、中国語では母音をしっかり発音することは重要だ。これも中国語の一音節が長いことに由来すると考えてよい。

巻舌音 zhi,chi,shi,ri は日本語にはない発音であり、先にも述べた通り中国でも南方の人、あるいは台湾の人は苦手で、しばしば舌歯音で代替する。おそらくは日本人にはこの方が適しているようにも思うのだが、とはいえ、教えないわけにもいかないので、これもまず有気音 ch,sh で子音だけ練習させてみるのが案外効果的である。

４　発音のまとめ

・中国語の一音節は、日本語の二音節に相当する。
・四声は高低の組み合わせ。軽声は短く（日本語の一音節に縮めて）発話する。
・とりあえずローマ字通り発音する。
・大袈裟に発話する。

母音

・日本語にない e ：アの口でオを発話する（顎を開く）
・u 音はしっかり口を窄めてやや顎を開き、口腔内の空間をしっかり確保。
・n,ng は舌先が上顎（上歯）に接するか接しないかの差、日本語のアンズとリンゴ、案内と案外の差と同じ
・ian(yan) は、例外的にイエンと発音。

子音

・無気音は「優しく」「控えめな」濁音
・有気温は、母音なしで発音できる子音：p,t,k,q,c,ch と f,h,x,s,sh 。子音だけで発音してみるのは効果的である。hu と fu 、tu,ti に注意。
・ ji,qi,xi はジイ、チイ、シイ（母音 i イを意識して）
・zi,ci,si はズー、ツー、スー、zu,cu,su はズウ、ツウ、スウ（母音 u ウを意識して）
・巻舌音 zhi,chi,shi,ri ばかりは、舌の位置を意識して練習あるのみ（それらしい音が出ればそれでよし？）

おわりに

以上、ほとんど筆者の経験というエビデンスに基づく論ではあるが、標準的な中国語発音の説明に教授という観点から一石を投じたつもりである。あるいは風車に向かうドンキホーテの槍のようなものであるかもしれないが。美しく流暢な発音ができるなら、それに越したことはないが、初学の段階では、たとえプアでブロークンであってもとりあえず通じる発音を身につけ、少しでも意思疎通を目指すことが重要であると思う。そのためにはできるだけ理解しやすい学習法のほうが良い。必要や興味があるなら、それを磨き上げれば良い。

なお、本文中でも少し触れたが、中国語音のカナ表記の問題について、少し述べておく。いわゆる現地音主義に基づいて、例えば中高の教科書の世界地図などかなり無理なカナ表記がなされていて、現地音を写しているはずなのに当の中国人が全く理解できない、という笑い話にもならない現状がある。これは、ピンイン表記を無視して、できるだけそれらしい音をカナで表記しようという

誠意の賜物ではあろう。しかし、厳密な発音表記は土台無理な話で、例えば英語の r と l をカナで区別はできないし、事実されていない(そもそもピンイン自体も、bo, po, mo, fo は buo, puo, muo, fuo と表記した方が、xiong は xuong と表記した方がより精確ともいえる)。

地図の中国地名については、むしろ音読で統一した方が無難であると思われる(とはいえ、ペキン、ナンキン、シャンハイ、ホンコンなど慣用的に使われるものは、もう帰るわけにいかないだろう)。中国語では、少なくとも日本の固有名詞を現地音(日本語音)で表記しようなどという話は聞いたことがない。

中国語音をカナ表記するならば、まずピンインとの対応を考慮したい。無気音は濁音表記で良い。また、中国語の一音節は日本語の二音節に相当するということも念頭におくべきだ。章子怡をジャンツイと表記したのではあまりに原音から離れる。せめてヂャンツーイー(3拍、カナで6音)とでも表記すべきではなかろうか。

そうすることによって、中国語学習の間口を広げることになるのではなかろうか。

また、漢字も日本語の文章では、簡体字を常用漢字に落とし込んだ方が良いと思う。

発音のカナ表記と漢字表記については、また稿を改めなければなるまい。

補:『東方學』第百四十四輯(2022 年)「先學を語る一尾崎雄二郎先生一」の髙田時雄先生の発言に「(尾崎先生は)中國語の音節というのは日本語の音節に比べて長いのだということをおっしゃったのです。(中略)中國語は一音節の持續時間が長いので、その中でいろいろな音聲的な現象が起こるのだということを多分考えておられたのだろうと思う」(p.102)とある。

補:ひそひそ声、というのがあってこれは声帯を使わない発音である。大体どの言語でも概ね発話することができるように思うが、どうしてなのか。有気音と無気音、濁音と清音との関係はどう説明できるのだろう。今後の課題で、たぶん、ある。